

は し が き

この研究報告は、新しい学力観に立った評価を行う際の問題点を明らかにし、その解決策を具体的に実践を通して探ったことをまとめたものです。

評価を行う上での問題点として、教師や生徒による評価の判断がぐらつき、生徒の実態が把握しにくい、評価したことをその後の指導に生かしにくいことが挙げられます。つまり、生徒がどのような状態であれば「十分満足できる」段階、「おおむね満足できる」段階、「努力を要する」段階といえるのか、その基準を設定するのが難しい、という声がよく聞かれます。

本研究では、上記のような問題を踏まえて、適切な評価の判断ができるように、評価規準を具体的な表現に改善しました。それを学習過程の中に位置付け、評価したことを次の指導に生かせるよう工夫しました。

また、実践的・体験的な学習場面を重視することが技術・家庭科の基本方針であることから、研究実践では授業過程の中に自己評価を設定して、生徒にものを作る楽しさや完成の喜びを体得させるとともに、学ぶ意欲を高め、学び続けようとする態度を身に付けさせることを目指しました。

実践的・体験的な学習は、新しい学力観が求めている「社会の変化に主体的に対応できる資質や能力の育成」に欠かせないものです。生涯にわたる学習の基礎を培うという観点からも、本教科の果たす役割はきわめて大きいと思います。

御高覧をいただき、日頃の指導に役立てていただければ幸いです。

おわりに、校務多忙にもかかわらず実践報告をしていただいた研究協力員の方々、所属校の校長先生をはじめ諸先生方の御協力に対して、心からお礼を申し上げます。

平成7年3月31日

新潟県立教育センター所長

青 木 一 男